HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	朝鮮農村社会瞥見記
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Citation	民族学研究, New1(1), 47-73
Issue Date	1948
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77421
Type	article
Note	著作集 V巻用、 5頁。
File Information	B013_0203p99p107_.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

四　朝鮮農村社會瞥見記

鈴木榮太郎

此四月から朝鮮に移り住む事になつた時、私はこれからの自分の直接の研究事項をあれやこれやと考へたのであるが、其等の何れの問題に對しても朝鮮の農村は最も多く私の研究材料を藏して居るところであると思つた。私は必ずしも農村社會學と云ふ樣な形で私のこれからの研究を統一しようと思ふのではないのであるけれども、矢張り農村が私にはこれからでも最も親しむ可き研究室である樣である。

私は愈〻朝鮮に來てからは、早く農村を見たいと極めて切なる願望を絶えず懷いて來たのではあつたが、然し一方にこちらの農村調査に對する私の抱負が甚だ大きくあつた丈に、それ丈私は私の第一回目の農村調査には期待するところ多く、やゝ硬直した樣な感じさへ持つに至つた。

第一回目の調査は恐らく此後の見方に對して色々の先入觀念を作るであらうから、第一回目の觀察は最も愼重に行ひ最も正確なものでなければならぬと思つたのである。それには豫めどんな準備が必要であるか。私はかくの如き準備についても色々に考へて見た。そして更に角調査に出掛けるなら充分の心の準備が出來てから出掛けるがよい、まだこちらに來て日も淺く家庭や大學での生活も充分に落ちついて居ないのである

から、こちらの風土に對して健康の自信も充分についてからでよかろうと自ら慰めながら荏苒日を過して來た。

然し私はまだそんな落ちつきが充分に出來て居ない内に第一回目の調査に出掛ける必要に迫られた。それは城大の總力聯盟研究班で此夏休みに學生四十名が參加して南鮮群山郊外の不二農場附近の農村生活を醫學や法律學や經濟學や社會學の方面から調査研究する事になり、その社會學的調査研究の豫備調査に秋葉教授と私とそれに研究班のマネヂャー格である學生主事補の泉靖一君と三人が出掛ける事になつた。秋葉教授は出發直前に都合が生じて行けなくなられたので、結局私と泉靖一君と二人で出掛けた。

そんな譯で此調査旅行は、私にとつては大事な朝鮮での第一回目の農村調査旅行ではあつたが、充分に心の準備が出來て居たと云ふ譯でもなく、又右の如き特別の使命を持つた調査であつたのであるが、然し結果に於ては矢張り行つてよかつたと今では思つて居る。

群山の驛についたのは七月二日の朝七時二十分。その前五時四十五分に裡里驛着、そこで群山行きに乘り換へたのである。京城驛から木浦行の列車でたつたのが昨夜の十時五分。車内は空席が多く、私が横になるには充分の座席があつたのであるが、とうゝ裡里につくまで一睡も出來なかつた。夜が明けて窓外が明るくなつたので、起き上つて窓から外を眺めたのはどの邊であつたかはつきりしないが、裡里の驛につく三四十分も前であつた。私は夜明けの淡あかりの中に展開する一面の水田が青々として田に水があるのを見て、とても嬉しかつた。夏の始め以來旱と雨がなかつたので田植ゑが出來ないで農村は困つて居るだらう、うつかりすると旱魃騒ぎでゆつくり調査など出來ないかも知れぬと案じて居たからである。裡里のあたりは一望

の水田で、朝鮮の穀倉と云はれる名に恥ぢない展望である。群山に着くまで水田ばかり眺めたが、よく見ると水は確かに充分ではない。少し高い位置にある水田などはまだ田植ゑが出來ないで居るところもある。然しそれは全體から見ればほんの少ししかない。

群山の驛に着くと、先發の泉君と不二興業會社の人が出迎へて居られた。群山驛からバスで一時間ばかりで不二興業會社沃溝農場に着いた。農場は門を入つてから屋敷の構へすでも數千坪もある雄大なもので、大きな倉庫や作業場が幾棟もあつた。中央に二千坪もある廣場があり、廣場の奥は丘陵になつて、正面の石段を登ると事務所や炊事場や食堂や座敷等が幾棟にも分れて居り、その背後の松山の中には場長や場員等の社宅が數軒も立つて居た。農場の中に郵便局もあり、局長の早川昇氏が農場の事實上の場長である。農場の事務所の一部が郵便局になつて居るのを見ても、流石に大經營の農場である事が分る樣であつた。農場の正面に立派な日本室の大きな座敷があり、そこを私等は滯在中提供されて居た。私等はその座敷で朝食を濟ましすぐ屯山部落の調査に出掛けた。

最初總力聯盟では、沃溝農村と不二農村とを調査する計畫であつた。沃溝農村とは不二興業會社沃溝農場の小作人の小作人約八百戸よりなるもので二三十戸乃至五六十戸の聚落に分れて居る。不二農村と云ふのは不二興業會社の水田約千町歩を經營する爲に内地の三十二府縣より募集されて來た内地農民が各府縣毎に十戸づつ聚落して居るものである。今は會社よりはなれて産業組合を組織して三十年間に毎年約千圓づつ負債を償却して三十年後には各戸三町歩の耕地と住宅を所有する樣になつて居る。現在は三百十八戸である。

右の二つの村は何れも不二興業會社に關係して居るもので、同會社で海岸の埋立をして作つた耕地約二千

町歩を經營する新開村で、まだ二十年の歴史しか持たない村である。總力聯盟では此二つの村を調査する事になつて居たが、朝鮮の一般の農村の事情はこれでは分らないし、私が右の二つの村の調査立案をするとしても、朝鮮の一般の村を豫め一つ見なければならぬので、今一つ古くからの村として附近の山麓の村屯山洞をも調査する事にした。かかる意味で附近の村の中から一つの村を選定する樣に前回泉君が下交渉に來られた時同君に依頼して、其結果同君が屯山を選定して居たのであつた。

朝食をすますとすぐ屯山を見る事にした。農場の指導員の一人で日本語のよく出來る半島出身の農場員高井君を案内者兼通譯となつてもらつた。

農場から屯山までは約半里で目がくらむ樣に眞夏の太陽が照つて居た。途中私は案内者に少しの暇もなく色々の質問をした。前に泉君が豫備調査に行つた時に同君が巫俗について色々調査したらしく、その爲に案内者は主として巫俗の調査と思つて居たらしいので、巫女の家にも行ける手筈がしてあると向こから云つた。泉君は城大社會學科の出身で秋葉教授の薫陶を受けた人、秋葉教授が朝鮮巫俗の研究者としての權威である事は誰も知つて居る通りである。話は巫女の事に移つた。このあたりの朝鮮人の部落では葬式は佛教によるもの、儒教によるもの、巫俗によるものの三類に分ける事が出來るが、最も多くは儒教によると云ふ事である。然しそれは家によつて定まつて居るのではなく、死んだ人の個人的信仰に基づくのである。信仰などは全く個人の好みによるのであつて、家によつては定まつて居ない。主人は佛教を好み妻は巫俗を好み息子は儒教を好むなどであつて、そんな事が家によつて定まつて居る樣な事は全然ない。案内者の高井君がさう云つた時私はハツと思つた。と云ふのは、私はこれ

迄朝鮮の農村に關し勿論全然無識ではなく、書いたものも幾らか讀んで居るし、岐阜に居た頃にも、半島出身の學生から朝鮮の農村に關して聽取した事も度々あつた。又昭和三年頃京城で全國農學大會があつた時に、水原附近の農村を見た事もあるし、昭和八年頃滿洲旅行の歸途秋葉教授と當時總督府に居られた村山智順氏の御東道を得て京城附近の農村を見た事もある。それ等の經驗を通じて得た結論の一つとして、私は朝鮮の家や村に於いては、內地の家や村に於けるより著しく個人が獨立して居ると思ふに至つて居たのである。この見方が誤つて居るか正しいかは此後の調査研究によつて明らかにされなければならぬ大きな問題の一つであるが、然し私は今から愈々腰をすゑて朝鮮社會の研究をなす可く運命づけられた以上、從來の不充分な根據から出來て居た先入觀念は一應全部捨てたいと心で願つて居たのである。今巫女の話から、私は忘れたいと思つて居た此先入觀念を又つきつけられた譯である。

葬式の時の話、病氣や出產の時の話、結婚式の時の話などを次ぎ〳〵に尋ね、最後に部落とは何ぞやと云ふ話を持ち出して色々話して居る內に屯山の部落に着いた。この案内者の高井君は非常に日本語のよく分る人で、この屯山から餘り遠くない村の出身で五十ばかりの溫厚な人である。今は內地式の姓に變へて高井君と呼んで居た。

屯山の聚落はその東北に在る二百米位の丘陵の山麓にあつて、その西南には千餘町歩の沃溝農場の水田が展開して居る。この水田の向ふには黃海が幾つもの島を浮べて擴がつて居る。沃溝農場が出來る前は、此部落は直接黃海に面し、鹽田經營をも加味した半農半漁の村であつた。屯山は非常に古くから續いて來た村の樣ではあるが、純農村になつたのは沃溝農場が出來て鹽田や漁業が出來なくなつた時からである。

屯山について案内された家は此春まで區長をつと

村の事を一番よく知つて居ると云ふ人の家であつた。禮を失する樣であつたが一應家の内を一通り見せて貰つた。前から私等の訪問を豫告してあつたと見え、或る一室に席を設けてあつた。朝鮮の民家の一室に客となつて坐するのははじめてである爲に、私はしきりに室内を見廻したり居心地を注意深く吟味して見た。内に坐つて見ると案外涼しくて落ちついて居る樣に思つた。凡そ客人の坐す可きところ、主人の坐す可きところ、第二位第三位の客の坐す可きところなどに順位のある事、室の一般の構造などについて一通り尋ねて居る内に、此村の所謂古老と云ふ人が來た。古老の服裝は禮服であつたと云ふ事をあとで聞いた。私等が色々の事を聽取して居る間に、村の人々が何人も土間の方にある窓の口から珍らしさうに顏を出して私等をのぞいて居た。

私がこの調査で確めたいと思つて居た第一の事は、内地の部落にあたるものがここでは何であると云ふ事であつた。それが昔の洞であると云ふ事を明らかにする迄隨分くどい樣な質問をしなければならなかつた。朝鮮に於ける自然村は面でもなく里でもなく區でもなく昔の洞であると云ふ事を、少くとも此度の調査の結果からは明白に云ひ得る樣である。

沃溝郡沃溝面は約二千百戸位であるが、此沃溝面は九つの里に分れて居る。その内の一つである魚隱里は六つの部落に分れて居る。今は部落と云ふが昔はそれを洞と云つたのである。

魚隱里(二三三戸)
- 屯山(九三戸)
- 馬山(四〇戸)
- 魚隱洞(五〇戸)
- 下野山(五〇戸)
- 間野山(四〇戸)
- 上野山(五〇戸)

右の内下野山、間野山、上野山の三部落は何れも干潟によつて近年開發された移民部落である。屯山は九

三戸であるが、それが又更に二つの聚落に分れて居る。屯山と新起村がそれである。新起村は十二戸で十數年前移住者によつて出來たもので、それが昔からの屯山洞と一つになつて今の屯山部落を形成して居る。今では村づき合ひは屯山と新起村は何も一つになつて居ると云ふ事であつたが、此點は充分に確かめ得なかつた。

幾つかの舊洞を含む里が久しく部落と云ふ内地式の呼稱をもつて呼ばれ、種々の農村生活指導もそれが單位とされて居たが、最近では古くよりの洞がもつと生活に即した團體である爲生活指導もそれを單位とする樣になり、部落と云ふ呼稱も現在では舊洞を意味する樣に變つて來た。内地に於ける農村指導が町村單位から部落單位になつて來たのと同樣の過程である。

昔は郡の下には洞があつたのである。それが内地に於ける維新前の村であつて、近時に於ける其運命も兩者相似て居る樣である。昔の郡は今の郡より小さく、全羅北道全體では郡の數は前より三分の一位減つてゐるさうである。昔は一郡に必ず社稷があつて、春と秋に祭りがあつた。旱魃の時の雨乞も郡内のものが集まつて社稷で行つた事が多かつた。併合後社稷は廢せられて居る。

舊洞が基本的な村落協同體である事は色々の點から觀取され得る。山神堂を共同維持崇敬する祭祀團體を組織して居る事、自治的機關として洞中契を組織して居る事、共同奉仕作業や洞宴がある事、共同勞働組織としてツレを組織して居る事、洞に總有の財産がある事等によつて、少くとも屯山洞は一つの村落協同體を構成して居る。これ等の點に關する聽取事項を述べる前に、洞が朝鮮一般に基本的村落共同體を形成して居るものであるかどうかについて參考までに一考して見る。

此點に關しては全鮮各地については一樣には云へない樣である。現に濟州島に於ける事情は少しく異つて

居る。けれども村山智順氏『部落祭』を見ると、部落祭を共同して居る者は生活の他の方面に於いても共同するところ多く、政治的道義的自治の制度をも具備して居る場合が多い。そしてこの部落祭を共同する一團の人々は明らかに洞を形成して居る人々である。

「この祭神をまつる部落民は、概して地緣に依つてその生活を共にする小集團であり、行政上の部落よりは一般に小さき群をなすものであつて、つまりは部落の最小單位を構成する祭祈團體と見做され得る。從つて行政上の部落中にはこの團體が一つの事もあるが、概して二つ以上、中には數個乃至十數個の多きに上るものもないではない。」(村山智順『部落祭』一頁)。

ここに行政上の部落と云へば、當時に於ける所謂部落で里を意味したものであらう。そして最小單位を構成する祭祀團體と云へば、それが洞を意味する事は後に說明するところによつて明白である。

部落祭の背後に洞會が存する事は、村山氏の部落會の祭官選定方法に關する調査報告の中に現はれて居る。

「年初に洞會を開き部落民中喪主又は不具者に非ざる者を選ぶ(慶尙北道盈德郡)。洞會を開いて、事故なく淨潔なる人を選ぶ(同、永川郡)。每年洞會を開き其年中喪なく又家族中妊娠者なき幸運の敬神觀念强き男子を選ぶ(同、星州郡)。洞會に於いて嚴選(慶尙南道馬山府)。慶尙南道各郡は皆洞會に於いて選定。洞會に於いて選定(黃海道安岳郡)。洞會にて推薦(同、載寧郡)。洞會を開き洞中の有望人物を選定(同、鳳山郡)。以下略」(同書二五九頁)。

右は祭官選定に關する調査に現はれて居るものであるが、部落祭の背後に洞會の存する事を積極的に調査した村山氏の報告もある。即ち部落祭に伴ふ洞會の有無に關する調査の一項である(同書、四六〇頁)。それによれば洞會の存しないところは極めて稀で、殆ど皆部落祭に伴つて洞會が開かれる。然し此洞會が部落祭のみに關するものであれば、それは寧ろ部落祭に附隨

した行事とも考へられる。部落祭とは關係なく洞の自治機關として洞會なるものが存するのであるか、そして洞會の一協議事項として部落祭の事をも議するのであるか。その點に關して積極的に調査した報告はないので、明白ではないが、部落祭に關係した洞會に於いて部落祭以外の部落生活に關する協議が行はれて居る事を現はして居る報告によつて、少くとも消極的には洞會が部落祭と關係なく存して居る事を察知する事が出來る。又そこに部落の自治の程度も幾分察知する事が出來る。部落祭に關係した洞會に於ける協議事項に關する村山氏の調査報告の中、祭事以外に關して協議して居る事例を摘出してみる。(同書、四六一頁)

年中行事に就き協議(京幾道永同郡)。基本財產管理報告、部落共同施設其他必行事項に就き協議懇談す(同、忠川郡)。部落民中非行者に訓戒を行ひ祭費の清算をなす(忠淸南道舒川郡)。各種任員の任免等(全羅南道麗水郡)。里洞長手當負擔額、洞稅算又は洞有財產管理に關する報告其他必要事項を協定(同、珍島郡)。部落民中篤行者を表彰することあり(同、盈德郡)。洞風敎化、農事經營、其他に就き評議決定(同、軍威郡)。以下略。

右の報告により洞會が如何なるものか、又洞會が位置して居る洞自體が如何なるものであるか。略察知する事が出來る。洞の自主的活動の中で部落祭は其單なる一つに過ぎない事が讀みとられる。祭事にも風紀にも一團となつて關與し、時には財產を持ち任免すべき役員をも有して居る生協同體である事が或る程度まで知られ得る。

次に右の生活協同體が洞より大きくもなく小さくもない事は、右に述べた洞會からも推定出來るのであるが、部落祭の祭名や祭神名からも亦知る事が出來る。即ち部落祭の祭名名及び祭神に關する村山氏の調査報告によれば、洞の名を用ゐるものが多い。明確に調査さ

れた三〇七例の中に洞祭と云へが八十五、洞神祭と云へが二十一である。その他では城隍祭四十八、山神祭三十七、堂山祭三十四、と云へのが多い例である。最も多いのは洞祭と云へ呼稱である。神名としては三九〇例の中、山神百十四、洞神百九、城隍神六十八、山川神二十三等である。地域團體を形容詞としたものでは洞が絶對的に多い。他には里社神があるのみである。（同書一二四頁）

朝鮮に於ける自然村は恐らく一般的には昔の洞であらう。そしてそれは客觀的には洞祭を營む祭祀團體として最も鮮やかに觀取されるものであらう。然し此洞が又後に述べる樣に農業上の共同勞働團體（ツレ）を組織して居ることは、洞の社會的獨立性を更らに鮮明なものとして居る樣である。

却説屯山に於ける部落神は、部落の背後にある屯軍山の頂上近い山腹に在る山神堂である。この邊では昔の洞には堂があつたところもあり無いところもある。あればそれは山神である。笠松を神木として祀るところも稀にはある。漁村には必ずあつたが、それは必ず山神堂である。附近の島の部落にも山神堂は必ずある。內地の金比羅樣のようなものだと高井君が云つた。

毎年の例祭の祝文や神饌等の事を記入した文書を見せて貰つたが餘程古い時代から毎年綴り加へられて今日に及んで居る。それを見せて貰へ、祝文を寫した。古い頃の年代を見たが、よく分らなかつた。餘り古いので最初の方は破れ落ちて居た。屯山にある古い記錄はこれ丈だと前區長が云つて居た。

山神堂の例祭は舊一月十五日であるが、その前一月三日に巫女が神前に禱りを捧げる。そして神懸りした巫女は米の中に挿し込んだ竹筒を手に持つて、恐らく神意のまに〳〵部落に降りて來て神の命ずる家に入り込むのである。その家が其年の祭官となつて祭祀の主役を演ずるのである。外に山上化主二人及び山下化主一人が部落民中清淨なる者（其家に不幸出産病氣等の

事なき者）の中から選ばれる。祭官の家は禁繩をはりまはし神聖視される。十一日から祭官山上化主山下化主は禊祓をはじめる。山麓の井戸は此部落隨一の良泉で、十三日に全部落民の手によつて井戸換へが行はれ、その周圍に禁繩が張られる。此の井水は十四日に始めて神前に供へられ、又此水で神前に獻げる鷄の料理もする。神酒二三升は豫め釀造してある。神饌の費用として部落各戸から三・四錢づつ課錢も徵されてある。十四日夜は祭官等が祈念して居る中に、部落民は總出で山神堂のある山の山林內を掃除して十五日朝に至る。祈榜に凡ての部落民は自分の名前を書き入れる。無名の赤子さへ其生年月日を記入する。村の四至及び中央には高く祭壇が設けられる。十五日朝には山神堂に神饌を供へ祭官が祝文を讀んで祀る。その式典がすむと部落の四至及び中央の祭壇に神饌を供へる。その神饌は一部は山神堂に供へたもの、一部は新らたに作つたものである。それがすむと五方廻りが行はれる。それは山神堂から洞祭（部落民の集合）と共に、部落民の中央の祭壇に次ぎ〳〵にねつて廻るのであつて、內地の祭例に於ける渡御と同樣のものである。此行列は先頭に令旗二本、次ぎに農旗一本、次ぎに軍物（太鼓鐘等の樂器の一組）、其次に部落の老若男女の一團である。軍物を奏する者は花冠、花襷、及び飾りの付いた帶をしめて居る。正午には午餐を共にするが、その時には部落民は全部村の中に入つて御馳走を食べる。この時課錢の最高出捐者が最上座の席につく。五方巡りが終つて夜になると、祭官丈が山神堂に參り燭を神前に供へて禱念する。

沃溝面の中で現在祭典を行つて居るのは此屯山丈である。屯山の祭典で主役になるのは祭官であるが、巫女の役割はもつと重要の樣である。山上に於ける祭式は祭官が行ふが、五方巡りの際には巫女が祭式の主役になる。儒教は祭禮には關係しない。然し祝文は儒學の出來る人が書く事は勿論であらう。

四十七年前コレラ流行の際、屯山では山神堂で豚を殺して犧牲として厄拂での祭りをした。其爲か一人もかからなかつた。其後も流行病の時には山神堂で厄拂での祭りをした。雨乞は以前は社稷でやつたが、山の上に假りの祭壇を設け豚の殺したままのものを供へて祭つた事もある。雨乞での祭りは部落(洞)主催の場合もあり、面主催の場合あり、又數部落(數洞)で共同でやる時もあつた。病蟲害除けの祈禱は毎年の山神堂の例祭の時その祝文中に述べ其際祈願する譯で、別にそれ丈の祭りとしてはしないと云ふ事であつた。

洞は行政上過去に於いてどんな取り扱ひをうけて來たかについては充分に聽き質す事が出來なかつた。それは重要な問題であるが、然し更に直接に重要な事は今日此洞の上にどんな集團が累積して居るかと云ふ事である。

屯山では洞全員加入の契としては洞中契がある。各戸より出資して、必要な人に貸與して其利子で洞全般に必要な費用にあてる。一般に洞には必ず洞中契はあると云ふ事であつた。一昨年四月から殖産契が出來たが、これは恐らく內地の農事實驗組合で、法人格を有する部落團體であるが、その意味の部落は舊洞で、ここでは屯山を一圓として居る。その理事長は絕對權力を有し、洞內の勞働力の配給なども命ずるものである。これが現在の洞の最も有力な推進力を有するものの樣である。又部落會があるが、そしてそれと殖産契とは別個であるが、矢張屯山を一圓として居る。恐らく一つの自然村としての屯山の強い感情は洞中契や洞祭に存し、新らしい理性は殖産契と部落會に存して居ると思はれる。

洞を一體とした村仕事の慣行は尙殘つて居る。洞中の井戸の掃除、道普請、崖崩れの修復、堤防の補修等洞內各戸から出て働き、そのあとで皆休む。近年までは三日間も休んで居た。其間に個人々々で酒を呑んで居た。特に井戸の清掃は正月山神堂の例祭の前に行ひ、清掃された清らかな水で山神を祀る。舊七月上旬頃にも井戸の手入れをするが、そのあとで洞宴を開く。今では殖産契の理事長の家か勞働班長の家で酒宴をはる。屯山には飲料の井戸が二つ、別に洗濯用のものが三つある。

昔は洞のツレの最高責任者であつた座上及び公員が洞中のツレの命令をした。今では殖産契の理事長が部落單位の共同作業を統制して居る。理事長は絕對權を持つて各戸の勞働の過不過を統制して居る。其命令は全く絕對的である。勞働を受けた者は、助力者に對し飯と酒を出し理事長の手許に賃銀を拂ひ、理事長が收支を決算する。理事長は面より指命されて居る者で年收百圓。ここでは本年五月一日に任命された。軍物(プンジヤン)は洞の財産である。太鼓や鐘などで一組になつた樂器で洞祭やツレの時など元氣づける爲に用ゐる。洞宴の時にも用ゐる。

七、八年前まではツレがあつた。ツレは水田除草作業の爲に洞內全部の農民にとつて結成された協働組織であつた。ツレは正月山神堂の例祭の前に行ひ、清掃された清らかな水で山神を祀る。舊七月上旬頃にも井戸の手入れをするが、そのあとで洞宴を開く。今では殖産契の理事長の家か勞働班長の家で酒宴をはる。屯山には飲料の井戸が二つ、別に洗濯用のものが三つある。

昔は洞のツレの最高責任者であつた座上及び公員が洞中のツレの命令をした。今では殖産契の理事長が部落單位の共同作業を統制して居る。理事長は絕對權を持つて各戸の勞働の過不過を統制して居る。其命令は全く絕對的である。勞働を受けた者は、助力者に對し飯と酒を出し理事長の手許に賃銀を拂ひ、理事長が收支を決算する。理事長は面より指命されて居る者で年收百圓。ここでは本年五月一日に任命された。軍物(プンジヤン)は洞の財産である。太鼓や鐘などで一組になつた樂器で洞祭やツレの時など元氣づける爲に用ゐる。洞宴の時にも用ゐる。

七、八年前まではツレがあつた。ツレは水田除草作業の爲に洞內全部の農民にとつて結成された協働組織であつた。ツレは正月山神堂の例祭の前に行ひ、清掃された清らかな水で山神を祀る。舊七月上旬頃にも井戸の手入れをするが、そのあとで洞宴を開く。今では殖産契の理事長の家か勞働班長の家で酒宴をはる。屯山には飲料の井戸が二つ、別に洗濯用のものが三つある。

昔は洞のツレの最高責任者であつた座上及び公員が洞中のツレの命令をした。今では殖産契の理事長が部落單位の共同作業を統制して居る。理事長は絕對權を持つて各戸の勞働の過不過を統制して居る。其命令は全く絕對的である。勞働を受けた者は、助力者に對し飯と酒を出し理事長の手許に賃銀を拂ひ、理事長が收支を決算する。理事長は面より指命されて居る者で年收百圓。ここでは本年五月一日に任命された。軍物(プンジヤン)は洞の財産である。太鼓や鐘などで一組になつた樂器で洞祭やツレの時など元氣づける爲に用ゐる。洞宴の時にも用ゐる。

七、八年前まではツレがあつた。ツレは水田除草作

業の爲に洞內全部の農民にとつて結成された協働組織であつた。ツレは正月山神堂の例祭の前に行ひ、清掃された清らかな水で山神を祀る。舊七月上旬頃にも井戸の手入れをするが、そのあとで洞宴を開く。今では殖産契の理事長の家か勞働班長の家で酒宴をはる。屯山には飲料の井戸が二つ、別に洗濯用のものが三つある。

昔は洞のツレの最高責任者であつた座上及び公員が洞中のツレの命令をした。今では殖産契の理事長が部落單位の共同作業を統制して居る。理事長は絕對權を持つて各戸の勞働の過不過を統制して居る。其命令は全く絕對的である。勞働を受けた者は、助力者に對し飯と酒を出し理事長の手許に賃銀を拂ひ、理事長が收支を決算する。理事長は面より指命されて居る者で年收百圓。ここでは本年五月一日に任命された。軍物(プンジヤン)は洞の財産である。太鼓や鐘などで一組になつた樂器で洞祭やツレの時など元氣づける爲に用ゐる。洞宴の時にも用ゐる。

七、八年前まではツレがあつた。ツレは水田除草作業の爲に洞內全部の農民にとつて結成された協働組織であつた。ツレは正月山神堂の例祭の前に行ひ、清掃された清らかな水で山神を祀る。舊七月上旬頃にも井戸の手入れをするが、そのあとで洞宴を開く。今では殖産契の理事長の家か勞働班長の家で酒宴をはる。屯山には飲料の井戸が二つ、別に洗濯用のものが三つある。

昔は洞のツレの最高責任者であつた座上及び公員が洞中のツレの命令をした。今では殖産契の理事長が部落單位の共同作業を統制して居る。理事長は絕對權を持つて各戸の勞働の過不過を統制して居る。其命令は全く絕對的である。勞働を受けた者は、助力者に對し飯と酒を出し理事長の手許に賃銀を拂ひ、理事長が收支を決算する。理事長は面より指命されて居る者で年收百圓。ここでは本年五月一日に任命された。軍物(プンジヤン)は洞の財産である。太鼓や鐘などで一組になつた樂器で洞祭やツレの時など元氣づける爲に用ゐる。洞宴の時にも用ゐる。

七、八年前まではツレがあつた。ツレは水田除草作

る。座上は各戸別各人別に出役日數と耕作面積を算定し、自家の耕作面積以上に出役する者には、後にスルメキ(洞宴)の時に勞賃をやり、以下の者からは賃銀を支辨せしめる。

ツレに參加した人を總稱してツレ軍と云ふ。ツレ軍とは集團的行動をする場合にのみ用ひられる語である。

ツレは其賑やかな團體行進に最も其特色を現はして居る。ツレには團體行進がつきもので、又其團體行進にはプンヂヤンがつきものである。ツレは次の樣な隊形で行進する。令旗二本、農旗一本、ガムマキ(銅羅の小なるもの)二、長鼓二、銅羅一、太鼓一、小鼓四、一般勞働者、と云ふ隊列である。ガムマキ以下小鼓までがプンヂヤンである。右の如き隊列を組み樂器を鳴らすのは、行進の時だけである。朝早くプンヂヤン軍の合圖の音を聞いてツレ軍は一箇所に集まる。座上は豫め其日の仕事の割當てと晝食を用意して說明したり配給したりする。プンヂヤンは行進以外には殆と用ひないが、勞働者がオルカトンアリの和唱する時など長鼓か太鼓がその伴奏をする。ツレ軍は終日その割り當てられた持ち場に於いて勞働する。ツレの作業は一夏の中に何回となく行はれる。

其年のツレの仕事が全部終ると舊曆七月七日に解散會がある。スルメキがそれである。漢字では洞宴と書くが一般にはスルメキと云つて居る。ツレの最後の一日の勞賃をスルメキの費用にあてるのである。餘剩があれば洞費に加る。スルメキを洞宴と書き、又スルメキの餘剩金を洞費にあてるところから見てもツレが洞と一體のものである事が分る。スルメキの日には洞內の有力者は酒や餅を寄附するのが例である。病人の家や寡婦の家などにはツレが除草をしてやるが、その賃銀は必ず支拂はしめる事になつて居る。

ツレと同類のものにチョリ、チャリ、クンクリと云ふのがある。これ等の中に明白に區別され得るものも

あるが、同義のものもある樣である。チャリは田植ゑの時に、全洞內の者が集まつて一有力者の田植ゑをする事である。此時にはプンヂヤンも用ひる。其有力者は賃銀を支拂ふと共に、スルメキの時に酒を出すのが例である。

クンクリとは朝鮮語の噂る(이야기)から出て居るものらしく、これも全洞員の出役の場合に用ひられる。クンクリの時は晝食は出ず、賃銀のみ支拂はれる。クンクリは全洞員總出動の意味の樣である。クンクリにはプンヂヤンがつく時もあり、又つかぬ時もある。クンクリとツレとの別は屯山の人達にはつきりして居ない。

チョリはツレと全く同義の樣である。南鮮一般にはツレの語が多く用ひられて居るが、屯山ではチョリと云ふ語が多く用ひられて居る。

プマシも一種の共同勞働である。プマシは田植ゑや除草又でなく樣々の形式の勞働にも用ひられて居る。プマシとは勞働の交換であつて、甲が乙のために一日の勞働をしてやれば、乙も一日の勞働を甲の爲になして報ひるのである。人數は二人以上樣々であるが、多くは四五人以上である。全洞員が一つのプマシに參加する樣な事はない。プマシの構成は、構成員の地域的距離や親疎の關係によつて影響されて居る。プマシを行ふのは親睦な間柄である。プマシには勿論プンヂヤンは用ひず指導者も居ない。プマシは勞働の必要に應じて行はれるのであつて、其構成員も其時々に變るのが常である。プマシは內地のユイと頗る似て居る。

プマシ、クンクリ、チャリ等が食事の爲に二類に分けられて居る。一つはマルンチョリ(乾いたチョリ)、他の一つはヂョズンチョリ(濡れたチョリ)である。前者は勞働ばかりが行はれて、食事は一切各自の家でするのであり、後者は勞働して貰ふ方の人が晝食間食酒等を出すのである。これ等の形式はプマシに最も多い。貧富の差の爲に食物の質(主として米と麥)の差が

あるので、これは交換の不平等になるところから、マルンチョリの形式が起つたのである。何かの都合で多量の食物を炊ぎ得ない場合にもマルンチョリになるが一般には貧富の別から起つて居るらしい。

チョリは能率上から上手は上手同志、下手は下手同志で組む事もあり、又後で酒を飲むのを楽しみにして愛飲者丈で組む事もあるが、食事の都合で組む場合が最も多い。即ち屯山でのチョリはお互に麥飯で許して貰へる氣易い者同志で組む場合が一番多い。

一般に人を傭へば米飯を出すのが禮であるが、七八月頃になれば此邊の農家には大抵米がない。麥を出し合ふ事が出來る氣安な仲の人々が相互に勞力を交換する爲に出來た場合が多い。勞働能率とか興味とか云ふ事よりも米の飯の問題がこの邊では主である。チョリの組み合せは毎年變るけれども、その組み合せは同の中である。

洞はそれを區分して洞の一里、洞の二里、洞の三里などとして居るところもあるが、屯山は昔から此區分けはない。近頃出來た新起村も屯山の部落の一部として別に分けへだてはしない。屯山が一村を成してからどれ丈たつて居るか分らぬ。傳說もない。然し一番最初にここに居た姓は姜氏であると云はれて居る。

現在屯山内の氏姓の關係を見ると、異姓が十五六ある。南平文氏が最も多く十三戸。金氏は本貫がここで十戸。文氏には宗中がある。宗中契もあるが宗廟はない。先祖の墓で一年一回宗中の祭がある丈である。然し他姓の者には宗中の事はよく分らぬ。文氏には家譜はない。よく系統を糺ねば屯山にも兩班もあるであらうが今は分らないから居ないと笑ひながら古老が云つた。屯山は今は全部農家であるが、二十一年前までは半農半漁、それに製鹽をして居た。農漁をするもの、鹽を作るものは卑賤の者とされ、兩班の住む村ではないと古老自身が云ふにくさうに云つた。

屯山には契は洞中契の外に色々の契があるが、それ

は洞中の者の間に存するとは限らず、他の洞の者との間にも存して居る。

爲親契と云ふのは、親の葬式の費用の爲の契で洞内外の個人間に結ばれて居る。爲親契は契の中で重要なものであるが、親があれば必ず加入して居る譯ではない。個人の都合によるものである。爲親契は親の葬儀の爲とは云つても、その目的が明白に示されてあつて、例へば父の爲、母の爲、妻の父の爲、妻の母の爲、と明示されて居る。故に葬式の爲ではあるが、子や妻の死亡には無關係である。母の爲とあれば母の葬式の爲に限つて居る。

現在屯山にある爲親契は十組ある。その各々は七八人乃至三四十人の契員からなり、大抵毎回に二三圓出し合つて居る。契員の中で親の葬式を行ふ必要がある場合は、契は六十圓の補助金を出す規定になつて居る。この意味からすれば契は一種の保險制度と云ふ得る。然し契は全體から見れば内地の講に頗るよく似て居る。春秋二回定期總會があつて契の財産の運用について協議する。役員として契長及び副契長が各一人づつが契員の内から互選して決められる。全く名譽職である。別に委員が若干名ある。外に契員以外で裕福なる人に財務と云ふ役目を依頼する。財務は三人居る。契の財産は財務の手に預けられるのであるが、財務は預かつた金に一割の利子を加へて春秋の定期集會毎に契に返還しなければならぬ。即ち半年に一割の利子である。その爲に財務は契員及び員外の者に預かつた金を高利で貸すのである。

他は葬式に關聯した契として喪輿契と云ふのがある。これは契員が共同利用する葬具を常備して置く爲の契である。契員は無料で契の葬具を利用する事が出來るが、契員外の者は一回につき五圓五十錢の使用料を契に支拂ふ事になつて居る。その金は葬具の修繕費として積立てられる。葬具小屋の管理の爲には契員の一人が其任にあたる。それを有司と云ふ。一般に葬具

の使用者は一回毎に有司に二圓の謝禮を出すことになつて居る。尙ほ喪輿契の契員等は葬式の爲には出來る丈援助し合ひ葬輿もお互に擔ぐことになつて居る。

婚姻契は結婚の費用の爲の契であり、親睦契は友人間の親睦の爲の契で、大抵同年輩の者の間に結ばれ、春秋二回親睦の宴をはる。基金があれば利子をつけて第三者にも貸與する。親睦契の利子が最も低率である。親睦契は云はば宴會費の共同積立である。婚姻契も親睦契も洞内外の人の間に結ばれ、後者には群山に居る者も加はつて居る。然し大體に里の内の程度である。又採利契と云ふのがあるが、これは共同で基金を作り、それを第三者に高率で貸し、其利子を得ようとするもので、組合組織の高利貸である。この契が最も高率である。此契も契員は洞の内外に居る。

屯山には寺もなく、又佛敎の信者も居ない。儒敎の先生の確信ある者は居ないが、普通に儒敎の事が出來る人は二三名居る。葬祭等に於いても指示するまでそれを行ふのは一般の人である。儒敎の先生を呼ぶ特別の呼稱はなく、一般に禮文を知つて居る人と云つて居る。こゝで葬式は皆儒敎の式によつて行つて居る。巫女も屯山には居ない。附近の洞に居る。巫女には其縄ばりがきまつて居て、春秋二回戸別に廻つて麥を貰ひあつめて居る。屯山でも病人がある場合とか、難産で死んだり、若くて死んだ樣な時には巫女を招じて呪術を行はしめる。然し巫女は一般に賤民と思はれ畏れ嫌はれて居る。信仰の意味では屯山の者は皆一樣である。公式には儒敎を信じて居るが、巫女の活動する場面も決まつて居る。

屯山の兒童が通學する國民學校は二校あるが、入學募集人員に對し應募數は遙かに多い。今春兒童四十名募集に對し沃溝面全部で二百名、女子四十名の募集に對し百名の應募者があつた。二校で百六十名入學した。現在屯山の兒童は國民學校一年より六年迄通じて二十五名である。屯山の總人口は五百十六名である。

國民學校卒業者は七名である。

屯山で聞いた事は大體以上の事であつた。午後不二農場村を訪問しなければならなかつたし、もう晝食の時間もとつくに過ぎて居たので禮服の長老の老人及び前區長に厚く禮を述べて歸途についた。元來た道を通つて歸つたのであるが、今度はゆつくりした氣持ちで歩いた。用水路の溝はいかにも鮒や鯰が居さうなよい釣場であるが、誰一人魚釣りして居る人は居なかつた。然し高井君の話では最近石灰を多量に田に用ひる樣になつてから幾分少くなつたが、鰻など泥中にうようよする程居ると云ふ事であつた。一天雲なく午後二時頃の太陽はやけつく樣に照つて居た。

沃溝農場に歸つて冷たい水で顏を洗つて蘇生の思ひがした。それから中食をとり十五分間ばかり休息して直ちに不二農村に向つた。バスが行く時間まで待つと相當時間を空費するので、自轉車で行く事にしたが、泉君は自轉車に乘れるが、私は乘れないので、農場員の自轉車の背後に乘つて行つた。貯水池の堤防上を走る時、風があつてヘルメットが吹きとびさうであるし、重心がどうも甘く定まらず、屢々心細くなり、とうとう堤防の途中で一應降して貰ひ堤防を越してから又乘せて貰つた。沃溝農場から不二農村の產業組合事務所までは一里位もあつたであらう。

事務所には泉君が前回來た時打ち合せをして、私等の調査の事もよく知つて居る主任の人が二三日前腦溢血に罹り寢て居ると云ふので、若い事務員の人と話した。その人は此春組合に來た人で殆ど何も知らず、印刷物や地圖によつて一緒に研究するより外仕方がなかつた。然し私は事務所には餘り用はなく、不二農村の村さへ見せて貰へばよいのであるから、印刷物の内から必要な點を書き拔いて、急いで農村に案内して貰つた。岐阜縣人の移住村は私としては母村について比較

的よく知つて居るので、都合がよいと思つて、そこに案内して貰つた。岐阜村は事務所から半里位で相當遠い地點にある村であるが、特にその村に行く事にした。

事務所の印刷物を通して知つたところによれば、又事務員が歩きながら説明するところによれば、所謂不二農村は現在三一八戸、行政上では沃溝郡米面中の一つの里を形成して居るのである。出身の府縣別に十戸づつ三十二の聚落をなして居る。各十戸の一聚落をここでは部落と呼び、出身の府縣名によつて岐阜村とか山形村など云つて居る。ここは不二興業會社が鹽田であつたところを田地に改修した開發新田約一千町歩の耕作の爲に、内地の各府縣から募集した農民の村で、大體三期に分つて入植して居る。

第一期地は大正十三年より十五年迄の間に約三三四町歩を耕作するもので百十戸入植して居る。第二期地は大正十四年より昭和二年の間に二九〇町歩の經營の爲に約九六戸入植して居る。第三期地は昭和二年より昭和五年の間に三七六町歩の經營の爲に約一三五戸入植して居る。右の三つの期地は各地域的にはブロックを成して居るが、人的社會的には組織はない。産業組合の事務所が全地域の略中央にあつて、最も遠い部落相互間の距離は約一里半である。目で見ても部落相互の距離も相當に遠く、一部落の十戸づつが水田中に島の樣に點在して居る。各部落毎に一人の班長があり、産業組合の評議員會は此班長によつて組織されて居る。不二農村の生産關係の事も其他の生活の事も一般的な事は此評議員會で議せられる。

本來此不二農村の土地は不二興業會社のものであつたが、此處に入植した農民達に産業組合を組織せしめ、その組合に會社が土地を賣却し、組合は三十年間にその負債を償却する事になつて居る。償却し始めてから岐阜村は今六年目であるから、あと二十四年たてば各戸約三町歩の水田を所有する自作農となる譯である。

昨年度の收穫について云へば、反當玄米二石、一戸三町歩で六十石、石四十二圓として二千五百二十圓である。毎年の負債償却額は入植期によつて異つて居るが、大體八九百圓、經營費が約千圓、然し裏作として麥その他の收穫も相當にある。各戸の收入、經營費、家計費は平均して次の樣である。

	收入	經營費	家計費
第一期	三、二三四・七九圓	一、八〇四・三六圓	八七六・一三圓
第二期	二、八四八・四二	一、七四三・九七	六〇三・七七
第三期	二、九四〇・四一	一、六二七・八七	七四八・七九

右の經營費の中には負債償却金も含まれて居る。右の計算を見ると相當よく行つて居る樣である。そして今二十四年たてば三町歩の水田を所有するのである。反當二石の玄米を收穫する水田は朝鮮では良田である。

不二農村では不二神社を維持して居る外、不二國民學校、不二公立拓殖農士學校、[illegible]ここに殘し、二、三男を北支や滿洲に出す樣である。又女子の趣都的傾向を抑える爲に近年不二實科高等女學校も設立されて居る。その外在鄕軍人不二農村分會がある、醫療は不二農村疹療所の醫者が居り、此人は神職の事もするさうである。又疹療所に産婆も居る。家は皆一樣で朝鮮の民家を原型として改裝した形である。

泉君と産組の事務員と私と三人細い畦道を通つて眞夏の午後の陽光をあびながら歩いたが、岐阜村に着くまでに幾つかの村の傍を通つた。

岐阜村に着くと産組の人は班長さんを呼び出さうと云へながら、私等を村の入口にある集會所の前に殘してさつさと村の奥の方に行つた。子供達が怪訝相な顔をしてすぐ集まつて來た。此離れ島の樣な十戸の聚落

には訪れる人も餘りないのであらう。集會所の入口には岐阜村と云ふ看板がかかつて居た。集會所は二十疊ばかり敷くがらんとした一室の建物で何の飾りもない。村の中にはアカシヤか何かの並木が道の兩側に植えてあつて、それが相當の大きさになつて居るのと、家毎に麥藁がうづ高く積んであるのと、又家が皆きたなく古びたようになつてゐるのとで、村はもう大分落ちついた村らしい景觀を呈して居た。家は皆全く同形で百姓家に似合はずガラスばりであるが、そのガラスの破損して居るのが多いのが眼にたつた。其外家は甚だしく荒廢して居る樣に見えた。內地の百姓家の造りであれば少し手入れをおこたつても荒廢の樣が目立たないが、外觀洋風まがいの此建築ではそれが著しく目立つのであらう。どの家にもうづ高くつまれて居る麥藁は燃料とするのであらう。

村の奥の方の家から產組の人に案內されて渡邊左衞門と云ふ人が來られた。私等は集會所の上り口に腰を下して色々の事をおたづねした。班長さんが不在なので村の事に一番明るい渡邊さんが來られたのである。

此岐阜村は第三期の入植の地で、最後に昭和五年に入植した人達である。入植した時は各戶の主人は大抵三十を一寸出た位のところで、四十六歲の小川さんが最も長老で、次が四十一歲の渡邊さんであつた。十戶で五十一人だつたと云ふから一戶平均五人で、平均的な家族構成であつたと思はれる。

渡邊さんと話して居ると、まもなく最長老の小川さんと班長さんが來られた。近所の家からお茶さへ運ばれた。小川さんは今年五十六歲、過勞の爲か年よりふけて見えた。私は入植後過去十年間恐らく村を率ゐて苦鬪して來た此三人の人達と話して居る間に、全く出征軍人を戰場に慰問して居る樣な氣持ちになつた。

昭和五年の五月一日に五十一人の一行が此村についたのであるが、行李もそこくにしてすぐ耕作を始めた。其後一年間は田植るから收穫まで共同で生活

したそれに炊事も共同で行ひ、五箇年間は浴場も共同で、此集會場で輪番でわかした。毎日入浴の時村中の者が集まり、色々會話して居た事は其後の村の融和の爲にどんなによかつたか分らぬと今では思つて居ると云はれた。始め共同炊事したのは、近所に野菜はなし男ばかりの家もあつたので仕方なくさうしたのであつた。今でこそ村の中に雜草も生える樣になつたが、當時は大地の上は全く壁の樣であつた。それでも第一年に葱と茄子とホーレン草丈は作る事が出來た。他の野菜は皆鹽分の爲に育たなかつた。

水田も向こで聞いたのとは違つて、よく出來なかつた。最初の年は反當粃で六斗八升、其時第一期地は其三倍位あげて居たので、努力すればあれ丈にはなれると云ふ豫想はもつ事が出來た。

當時は勞賃が非常に安く、附近の朝鮮人が牛を連れて來て五反を耕して其賃銀が一圓六十錢であつた。人夫賃は四十五錢位であつた。反當收益は年々增して來たが、旱害、風害の年もあつた。昨年度においては團體的にも個人的にも岐阜村が不二農村で第一位であつた。

十戶で一團をなして居る部落が八箇集つて、つき合仲間を作つて居る。葬式の時など、他の七部落から代表が弔問に來る事になつて居る。不二農村が全部で かくの如き組四つより成つて居る。然しこの組は餘り大きな働きは持つて居ない。

最近では結婚も不二農村內で結ばれる事が多くなつた。產組で共用の式服を備へて居るので、それを用ひて學校の講堂で式をあげる。產組の醫者が神官の心得もあるので、その人が主祭者になる。

岐阜村の人達は全部武儀郡上ノ保村の大部分同じ字から來て居る。字が別の者も隣り字で、向こに居た時から皆知り合つて居た仲である。學校は男も女も皆同じ學校に通つた者である。

班長さんは今四十四五であるが、入植した時渡邊さ

んと小川さんの二人の年長者が居られたので都合がよかつた。若い者ばかりはとてもよくないと云つて居られた。

風土や人情の全く異つたところに最初落ちついた頃は心細かつた。夕闇せまる頃どこからともなくヒューと云う鳴き聲がするのを聞いて、女子供は青くなつてた。後になつて知つたが海鳥の鳴き聲であつたのである。出身の武儀郡は大體に山村で海には全く縁のないところであつた。其頃心細い思をして居た頃には特に近所が有り難かつた。渡邊さんはほろりとして云われた。又當時はお互に不平があつても誰一人云う者はなかつた。渡邊さんがさう云はれると、班長さん小川さんも首をたれて感慨にふける風であつた。「うちの村又は今でも喧嘩がありません。」渡邊さんはさう云いながら、兩眼をうるおして居られた。

それから私等は急いで家の構造を見せて貰う爲に班長さんの宅に行つた。家の構造については三人共極度に非難して居られた。百姓の生活知らぬ人が机上で作つた設計だと云つて居られた。落ちつきがなく、それで居て不便である。何でも朝鮮の民家を原型とし、それを外觀丈洋風瓦葺にしたものの樣である。床の間がない事もよくない。見るからにどことなく落ちつきがない。學校の小使室の樣な感じである。

三人の方に見送られながら六時半のバスに間に合う樣に二キロの路をいそいで產組事務所の前に歸つた。そこで待つて居ると、先程會つた岐阜村の最長老の小川さんが自轉車に荷をつけて私等の傍を通つて行かれた。私は心からの親しみと敬意をもつて帽子をとつて一禮した。

〔追記〕此一文は調査の旅行から歸つたあと數日間の中に出來る丈記憶の新たな內にと思つて急いで書いたのである。そしてそれと共に城大總力聯盟研究班調査隊社會學組の調査の計畫案を作製した。七月十一日

京城社會學會の例會の席上、私は此一文を讀むと共に調査隊社會學組に加はる學生も全部そこに居たので、計畫案の說明をした。此例會は調査隊の出發前の打合會の如きものであつた。調査隊は七月二十日から約十日間ばかり現地に滯在して調査したのであるから、その報告は頗る詳細である。出來る丈早く出版される事になつて居る。私は今此一文を上梓するにあたり、學生の報告にもとづいて、一部分補修したところがある。尙此一文は屯山を調査した翌日に試みた沃溝農村の調査の報告にも及んで居るのであるが、ここでは割愛する事にした。

最後に私が研究班の爲に立案した調査計畫案を附記して置く。それは「屯山部落に於ける社會構造に關する調査」、の計畫案と、「不二農村に於ける移住農民の定着性に關する調査」の計畫案である。

〔第一〕 屯山部落に於ける社會構造に關する調査
（主として各種集團の活動と其地區の歷史的推移に關する調査）

第一　行政的地域集團（面、里、洞、區、部落の地區の變遷、戶數）
第二　部落神の祭祀關係
第三　契集團（葬儀に於ける共力の組織）
第四　近隣團體
第五　經濟的集團（部落有財產、殖產契、其他產業上の團體、ツレ、プマシ、共同利用設備）
第六　官設的集團（青少年團體、部落會、婦人會、國民學校、警防團）
第七　宗中集團、部落內の氏姓の別
第八　洞會、村仕事慣行、懲罰及表彰の組織、共同祈願（雨乞、疫病拂ヒ等）
第九　通婚圈、賣買圈（概要聽取の程度）
第十　來住者の取扱に關する慣行

〔第二〕 不二農村に於ける移住農民の定着性に關する調査

一　調査部落の選定の方針

第一期地、第二期地及び第三期地の各々より選出する事。内地母村の地方別、東北・中部・九州のおのおのより選出する事

右の二つの條件により部合九部落を選定する事。

一　一部落各戸より聽取すべき事項

(一)年次順家族構成表記入(別表)

(二)母村の郡村字名

母村は山村か平坦地か郊外地か（これは母村の都市化の程度を知る爲であるから、最寄りの郡事務所、又は縣廳所在の都市までの時間的距離も聞くがよい。）

(三)母村に居た時の生業(副業をも含む)、水田經營の經驗(何反の水田を經營して居たか)

(四)母村に於ける社會的地位(地主、自作、小作)、教育程度

(五)移住後遭遇した一家の大事件

(六)第二世の教育と結婚（嫁は村内からか、母村からか、他所からか)(定着性に結びつけて質問すべき事）

(七)將來に對する希望

歸國せんとする希望ありや、なしや。

第二世への希望(特に定着性に關して)

(八)家計費内容の檢討

(九)母村に於ける水田反當地價

二　部落内の入植當初からの事情に明るい人に聽取すべき事項

(一)入植後離村したる者につき一の(一)、(二)、(三)、(四)、(五)、(六)に關し聽取

(二)部落の成長史

(三)隣保共助の程度と其歴史的推移

生業に關するもの（田植、草取、刈入、脱穀、共同購入及び共同販賣）

吉凶時に於けるもの(出産、結婚、病氣、葬儀)

共同炊事、共同浴場、祭祀、娯樂

(四)部落の離村した者についき離村の理由

(五)休養及び娯樂、農閑期は如何に過すか

農休みの時の生活(兩性別、年齢階級別)

(六)定着性に關する意見

三　机上にて整理し考察すべき事

一、一部落(十戸)全員の毎五年度人口構成表作製

(但し五歳年齢階級別)

二、九部落全員の現在人口構成表作製(但し五才年齢階級別)

三、最も定着性に富む部落は母村の如何なる條件によるか、又入植の際の又其後の如何なる條件によるかの推定

四、離村したる者は主として如何なる條件により離村し者なるかの推定